

薬剤師が “働き続けたい”薬局とは？

薬局経営において安定した薬剤師の確保は重要なテーマです。薬剤師の採用にはコストも労力もかかります。そのため、「どうすれば薬剤師が長く働き続けてくれるか」「やる気は落ちていないだろうか」という悩みがつきません。

薬剤師の仕事は責任が大きく日々の業務は多忙です。その一方で、患者からの信頼や専門職としての成長実感など、多くの“やりがい”がある職業でもあります。

この“やりがい”を“働きやすさ”につなげられるか—これが離職率を下げ、長期的な戦力を育てる鍵となります。本記事では、薬剤師がどんな点にやりがいを感じるかを整理し、「薬剤師が働き続けたいと思う薬局づくり」のポイントを紹介します。

1. 患者に寄り添い・感謝される実感

薬剤師の魅力の1つは、医療人として患者の健康に貢献できる点です。「あなたに相談して良かった」という言葉は励みになります。例えば、薬剤師が複数の医療機関と連携して処方重複や副作用リスクを減らすことは、患者にとって価値の高い専門行為でしょう。このように専門的支援が患者の安全につながる瞬間、薬剤師はやりがいを感じます。

また、かかりつけ薬剤師として患者の疾患の経過や生活習慣まで把握して寄り添えることも薬剤師の誇りになります。患者とのコミュニケーションに時間をかけられる現場体制を用意することで、“追われる調剤”ではない働き方が可能になり、薬剤師のやりがいを支えられます。

全自動分包機、調剤ロボット、監査システム、電子薬歴システムなどを活用し、「薬剤師でなくてもできる作業」をできるだけ削減することが重要です。薬剤師は“対人業務にゆとりを持って取り組める”ほどモチベーションが高まるでしょう。

2. 自身の成長を実感できること

薬剤師にとって学び続けることは喜びで、専門的な成長がモチベーションにつながります。

また、キャリアとしての成長、「何年働けば、どんな役割を任せられ、給与がどう変わるのか」というイメージが持てることも重要です。キャリアパスが曖昧な薬局は総じて離職率が高い傾向にあります。

研修費補助、学会参加支援、資格取得サポート、薬局内の勉強会体制などを整えると離職率が下がります。とくに認定薬剤師・専門薬剤師の取得支援は効果的です。

3. チーム医療に貢献できること

医師・看護師・多職種と連携し、薬物療法の安全性を高める役割を果たせることは誇りとなります。

薬剤師が薬学的知見から提案することで、よりよい治療方針を決めることにも貢献でき、専門家としての実感を得やすい領域です。

医療機関との連携プロトコル作成、在宅医チームとの定期ミーティングなど、薬剤師が医師に意見を伝えやすいような連携体制を整えておくと自己効力感の向上につながります。

4. 地域や他施設との交流

薬局はどうしても小さい空間で閉鎖的になりがちで、さらに一人薬剤師となってしまう職場もあります。

中には「そういう方が性に合う」という方もいますが、地域との交流や薬剤師同士のつながりは、成長とモチベーションを支えることも多いです。健康相談会の実施などは地域から必要とされている実感が高まります。学会参加、地域薬剤師会活動、外部勉強会、近隣店舗や系列店舗との交流会、こうした場への参加を会社として応援することで、薬剤師は「職場から大切にされている」と感じ、離職意向が低下します。

5. ライフステージに合わせやすい働き方ができること

育児や介護があっても働き続けられる柔軟性は、薬剤師が長く薬局に残る大きな理由の一つです。

シフトの柔軟性や急な休みのサポート体制、時短勤務制度は、優秀な薬剤師をつなぎとめる重要な要素です。

子育て支援、時短勤務制度、シフトの柔軟性、休暇の取りやすさ、が整備されている薬局は、総じて定着率が高くなります。

まとめ

薬剤師が辞めない薬局は、
「やりがい」と「成長」と「働きやすさ」が両立している

- 患者と向き合える時間を確保すること
- 成長機会とキャリアパスを明確にすること
- ライフステージに寄り添った働きやすさを提供すること

これらはいずれもオーナーからするとコストになります。しかしながら、これらが揃う薬局は、薬剤師が安心して長く働ける魅力的な職場になります。結果として、患者満足度も高まり、薬局経営も安定することになるでしょう。